調査・研究ノート

曲がり角にきた花の生産

はじめに

最近の花卉生産で注目されるのは、一九九〇年頃まで農産物の中で唯一大幅な伸びを示していた花卉の需要が、バブル経済が崩壊した九二、九三年頃から弱含みとなり、いまだに停滞を脱していないことである。

即ち、一九七五―九〇年の花卉生産額は農業生産全体が一・三倍と伸び悩む中で四・〇倍と大幅に増加した。これに対し九〇―九六年のそれは一・一二倍、九三―九六年では一・〇二倍と横ばいの状態にある（以下、農水省資料による）。

今回の調査はこのような中で、産地にいかなる変化が生じているのか、産地はどう対応しようとしているのか、需要の今後はどうか等をヒアリングし、花卉の生産と流通に係わる課題を整理しようとするものである。

まだ、現地調査に着手したばかりであるが、ここに調査の一端を紹介のこととしたい。

なお、一九九六年の農業生産の中で、花卉は生産額（花木類含む）で六・〇％、作付面積で一・〇％、栽培農家戸数で四・三％を占める。

一、花卉生産の種類と動き

九六年の花卉生産額は六、二六五億円。その内訳は、切花類が四七％、鉢もの類が二三％、花木類が二六％、球根類が一％、芝地被類が三％となっている。

うち、切花ではキク、カーネーション、バラが三大切花と言われ、切花生産額の各々三三％、八％、一一％を占め、その他ではトルコギキョウ、宿根カスミソウ、スターチス、リンドウ、球根切花（ユリ、チューリップ等）などがある。また、鉢ものは洋ラン、観葉植物、シクラメン等である。

これらについて七五―九〇年の生産額の伸びを見ると、切花は三・九倍（出荷数量一・六倍）、鉢ものは四・一倍（同一・九倍）、花木は四・四倍といずれも大きく増加している。切花の内訳は、キク三・一倍（出荷数量一・五倍）、カーネーション三・八倍（同一・五倍）、バラ五・八倍（同二・一倍）、その他切花四・五倍。

ところがこれらは九〇年代に入ると伸び悩み、九三―九六年の切花生産額は〇・九九倍（出荷量一・〇三倍）、花木は〇・九二倍と停滞し（鉢ものは一・二四倍）、更に九七年、九八年も停滞が続いている。九七年以降では、たとえば、九七年の切花出荷量は前年比一〇〇％と横ばいであり、また、切花の年間平均卸売価格も、九五年が前年比九八％、九六年九八％、九七年一〇二％、九八年一〇六％とやや回復したかに見えたが、九九年三月には再び前年同月比九三％と落ち込んでいる。

二、県別シェア

九六年の花き生産額（花木類含む）を県別シェアで見ると、愛知一四・〇％、千葉一〇・七％、福岡七・一％、埼玉五・〇％、静岡四・九％、鹿児島四・八％、三重三・六％、長野三・五％という順にある。

また、切花のベスト3は愛知一五％、長野六％、千葉六％の順であり、鉢ものでは愛知二三％、埼玉九％、静岡五％、花木類では千葉二七％、福岡一五％、三重九％となっている。

次に七五―九六年間におけるシェア推移（花木類除く）を見ると、既往産地では愛知が一三・一→一六・四％と大きく上昇したほかは、千葉、福岡が横ばい、埼玉、長野、静岡がややダウン、大都市圏の神奈川、兵庫等もダウンという状況にあり、一方、シェアを伸ばしているのは北海道、岩手、和歌山、鹿児島、沖縄等、遠隔にある新興産地である。これら新興産地は、寒冷や温暖という気候を生かした産地づくりを行い、更に花の輸送技術の向上もあってシェアを伸ばしてきたもので、大半は自治体や農協主導で花卉の生産団地づくりを行い、共販率も高いという特徴を持っている。

三、産地の動き

いくつか現地の状況を紹介する。

㈠千葉県安房地方

千葉県の花卉生産額（九六年。花木類除く）は全国五位、シェアは五・二％。うち当地方の一一市町村（館山市、鴨川市、丸山町ほか）は一二五億円で県内の五二％を占め、一大切花産地を形成する。地域農業生産額に占める割合も三三％で第一位。うち、上位を占めるのはカーネーション二二億円、ストック一一億円、きんぎょそう七億円であり、その他バラ、アイリス、スターチス、フリージア、カスミソウ、きんせん花等も一億円を超えており、多品目少量生産が当産地の特徴である。

ＪＡ安房（鴨川市のみ管轄外）に伺い、共販状況をヒアリングした。農協は九六年四月の合併。現在の共販率は八％と低いが、それは首都周辺の他産地と同様に歴史が古く、個人販売が根強く残っているためという。

共販率を上げるために農協は現在花卉農家の組織整備に取組んでいる。九八年に三、一四〇名参加で花卉部を設立。その後、専門部会として、ストック部会、スナップ（きんぎょそう）部会も設立している。

また、販売については、太田市場を中心としながらも、地方市場も活用し、有利販売や価格安定に力を入れている。

一方、農家側には後継者難という問題があるもよう。

㈡愛知県渥美町

花卉生産額は全国市町村のトップ（九六年二五二億円。次いで隣接の赤羽根町一〇九億円。三位は浜松市七七億円。花木類除く）。葬儀用の大中輪ギクが中心であり、同品目では量的にも質的にも全国一を誇り他の追随を許さない。その他でも、ガーベラ、トルコギキョウ、スイートピー、アルストロメリア、グロリオーサといった切花や鉢物合計の生産額が愛知県内の第一位にある。農協の共販率はキクを中心に高い。

同町は野菜の生産も盛んで、農業粗生産額は全国第二位。農家二、二八〇戸のうち、農産物販売額が一、〇〇〇万円以上の農家が一、四四二戸もあり（うち三、〇〇〇万円以上三〇〇戸。九五年農業センサス）、Ⅱ兼農家率はわずかに一三％にすぎない。

渥美半島は終戦直後は半農半漁の寒村であったが、一九六八年における豊川用水の開通、六〇―七〇年代を中心とした農業構造改善事業による大型温室団地の造成、栽培技術の集積、共選共販体制の整備、農業改良普及所・農協・町等の支援などを通じて一大農業地帯へと発展してきた。

ところで、全国的に花卉の需要が停滞する中で、今後の大中輪ギク生産に係る課題は省力化とコストダウンにあるもようである（別の課題であった生産者組織の強化は一九九五年に終了。ただし、最近、若干の組織離れが生じている）。

たとえば、農家の省力化のために（出荷時に太さをそろえ束にして箱詰めにする作業が各農家で夜中まで続いていたという）、ＪＡ愛知渥美町は大中輪ギクの大型自動選荷機を導入した。事業費二二億円（うち国補助一一億円）。

㈢愛知県西尾市

県の資料によれば西尾市の九七年花卉生産額は三三億円（花木除く）で、カーネーション（六億円）と鉢物（二三億円）が中心であるが、カーネーションの出荷量は全国市町村の第四位、県内では第二位を占める。

市内には二つの農協があり、カーネーションを扱うＪＡ西尾市に伺った。当農協の管内には二つの生産者組合があり、所属農家は一六名、九七年共販額は四億円。うち、小栗花卉温室組合は七五年四月の温室団地造成を契機に結成されたもので、農家一〇名、共販額三億円。一戸平均が三千万円というカーネーション専作の大規模農家集団である。

農協が特に力を入れているのは高値安定販売。市場の選定に配慮するほかに、予約相対や年間契約方式の導入、格落ちものの販路確保などを行っている。投資は出来る限り押さえるという方針で、自動選荷機の採用は当面考えていない。

以上、現地調査の内容を整理しないままに並べたが、これら産地は生産面、流通面のコストダウンを課題の重点に据えながら、組織強化や品種改良にも留意してシェアを維持し、この停滞期を乗り切ろうとしているように見受けられた。

（田村　猛）